

▶埋設された土師器  
(遺物包含層1、古代、西から)

土師器は、古墳から平安時代の土器です。逆さまになった状態で埋まっている様子が確認されました。



◀土坑 (遺物包含層1  
中世、南から)  
壁面や床面は、赤く焼かれています。また、土坑の中には、石が規則的に並べられている様子も確認されました。



▲中世の平坦面 (遺物包含層1、東から)  
当時の地形を削るようにして平坦面が形成されていました。その面には多くの柱穴や溝が作られている様子が見られました。



▲椀型滓  
鍛冶をした後に残る椀の形をした鉄の塊です。土坑の中から多く見つかりました。



▲中国銭  
表面にみられる文字から、北宋銭と考えられます。

### 3. まとめ

牡鹿半島において縄文時代や中世頃の人々の生活を解明していく上で重要な成果がわかる発掘調査となりました。縄文時代の成果としては、縄文時代前期を中心に斜面部に集落が形成されていたことがわかりました。また、その後その場所に縄文時代前期から中期にかけて遺物包含層が形成され、さらに埋まってくる過程でも人々に利用されていたことがわかってきました。これらの時期については、平成25年度に調査を終了している中沢遺跡でもほぼ同様な時期の良好な資料が得られているため、これとあわせて、県内では調査例が少なかった時期の多くの資料が得られたことも大きな成果です。さらに、中世にその当時の地形を改変し、建物などを立てて生活していた様子や鍛冶が行われていたことも確認されました。さらに、時期は不明ですが大型の掘立柱建物もみつかります。これらの海浜部の人々の生活の様子が明らかになったことは重要な成果です。

#### 【関連年表】

時代	年代	主な出来事	市内の遺跡	
旧石器時代				
縄文時代	草創期	16,000年前	土器・弓矢の使用が始まる	
	早期	12,000年前	貝塚がつけられる	
	前期	7,000年前	気候が温暖化し、海水面が上昇する	梨木畑貝塚
		6,000年前	中礫テフラ (To-Cu) が降下	中沢遺跡・羽黒下遺跡
	中期	5,500年前	三内丸山遺跡で大集落が営まれる	仁斗田貝塚
後期	4,500年前	気候が寒冷化し、海水面が下降する	給分浜貝塚・羽黒下遺跡	
	3,300年前	東日本で亀岡文化が栄える	南境貝塚・宝ヶ峯遺跡	
晩期	3,300年前	東日本で亀岡文化が栄える	沼津貝塚	
弥生時代	2,500年前	稲作が伝わる		
古墳時代	1,700年前	古墳が盛んに造られる	新金沼遺跡・中沢遺跡	
古代	飛鳥時代	1,400年前	大化の改新 (645年)	五松山洞窟遺跡
	奈良時代	1,300年前	平城京遷都 (710年)	新田東遺跡・角山遺跡
			多賀城がつけられる (724年)	桃生城跡
平安時代	1,200年前	平安京遷都 (794年)	中沢遺跡	
中世	鎌倉時代	800年前	源頼朝が鎌倉幕府を開く (1192年)	須江藤塚遺跡
		600年前	足利尊氏が室町幕府を開く (1336年)	羽黒下遺跡
	室町時代	600年前	応仁の乱 (1467年)	
		500年前	織田信長が入京する (1568年)	
戦国時代	500年前	豊臣秀吉が全国を統一する (1590年)		
近世	江戸時代	400年前	徳川家康が江戸幕府を開く (1603年)	

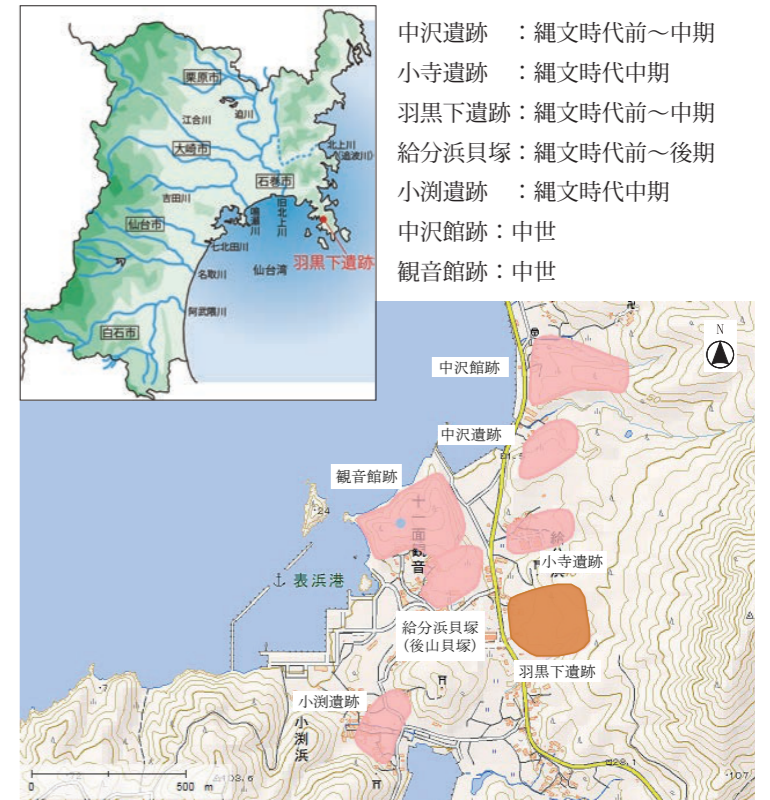


#### 調査要項

遺跡名 : 羽黒下遺跡  
(宮城県遺跡登録番号: 74007)  
所在地 : 宮城県石巻市給分浜字羽黒下  
調査原因: 防災集団移転促進事業  
調査主体: 石巻市教育委員会 (派遣職員: 神戸市)  
調査協力: 石巻市復興事業部集団移転推進課  
牡鹿総合支所  
宮城県教育委員会  
(派遣職員: 長野県、島根県、石川県、千葉県、山口県、群馬県、兵庫県、新潟市)  
調査面積: 約 8,500 m<sup>2</sup>  
調査期間: 平成26年11月~平成27年12月 (予定)

### 1. はじめに

防災集団移転促進事業 (石巻 (小浜) 地区 防災集団移転宅地造成工事) に伴い、石巻市教育委員会では平成26年11月4日より羽黒下遺跡の発掘調査を実施しています。東日本大震災の復興に重要な役割を果たす高台移転事業を円滑に進めるため、石巻市教育委員会は宮城県教育委員会が示した発掘調査基準の弾力的な運用に準拠し、宮城県教育委員会の協力 (職員の応援) を得て早期の調査終了を目指しています。羽黒下遺跡は、牡鹿半島南西部に位置し、石巻湾に面した「小浜」を見下ろす標高約28mの丘陵上に立地しています。羽黒下遺跡の周辺地域には同時期の縄文時代から中世までの遺跡が多く所在しています。丘陵の全域での調査の進



羽黒下遺跡の位置と周辺の遺跡



調査区全景 (上が北西)

展に伴い、徐々に明らかになってきた遺跡の全体像について、昨年度から現在までの調査成果を中心にお知らせします。

## 2. 調査成果

これまでの調査から、縄文時代前期を中心とした時期の集落跡や縄文時代前～中期の遺物包含層（遺物を含んでいる層）、古代～中世の遺物・遺構が見つかっています。右図で遺物包含層1と示した範囲において、斜面部を中心に縄文時代前期初め頃の竪穴状遺構が14基みつかっています。竪穴状遺構は住居の可能性もあり、その時期に集落が形成されていたことも考慮に入れています。さらに、その後に縄文時代前期から中期（約7,000年前～約4,500年前までの間）の時期にわたって、約2mの深さの遺物包含層が形成されていることがわかりました。また、ほぼ同時期の遺物包含層2・3が丘陵の西斜面、北斜面でもみつかっています。遺物包含層1・3では、火を焚いた跡もみつかっています。縄文時代の遺物包含層では多量の縄文土器や石器、土偶、石製品などが出土しています。また、遺物包含層中からは、約6,000年前の十和田火山の大噴火によると考えられる火山灰がみつかり、年代を特定するものさしになっています。

縄文時代以降には、その当時の地形を改変する形で中世頃に平坦面が形成され、その面に建物が構築されている様子や、また別な箇所では、古代の土師器が埋設されている様子も確認されました。さらに焼土範囲も見つかっています。出土遺物は土師器、中国銭、中世陶器、鉄滓などです。また、時期は不明ですが、右上図の紫色で示した箇所に母屋が4間×1間でひさしを持つ掘立柱建物が見つかっています。



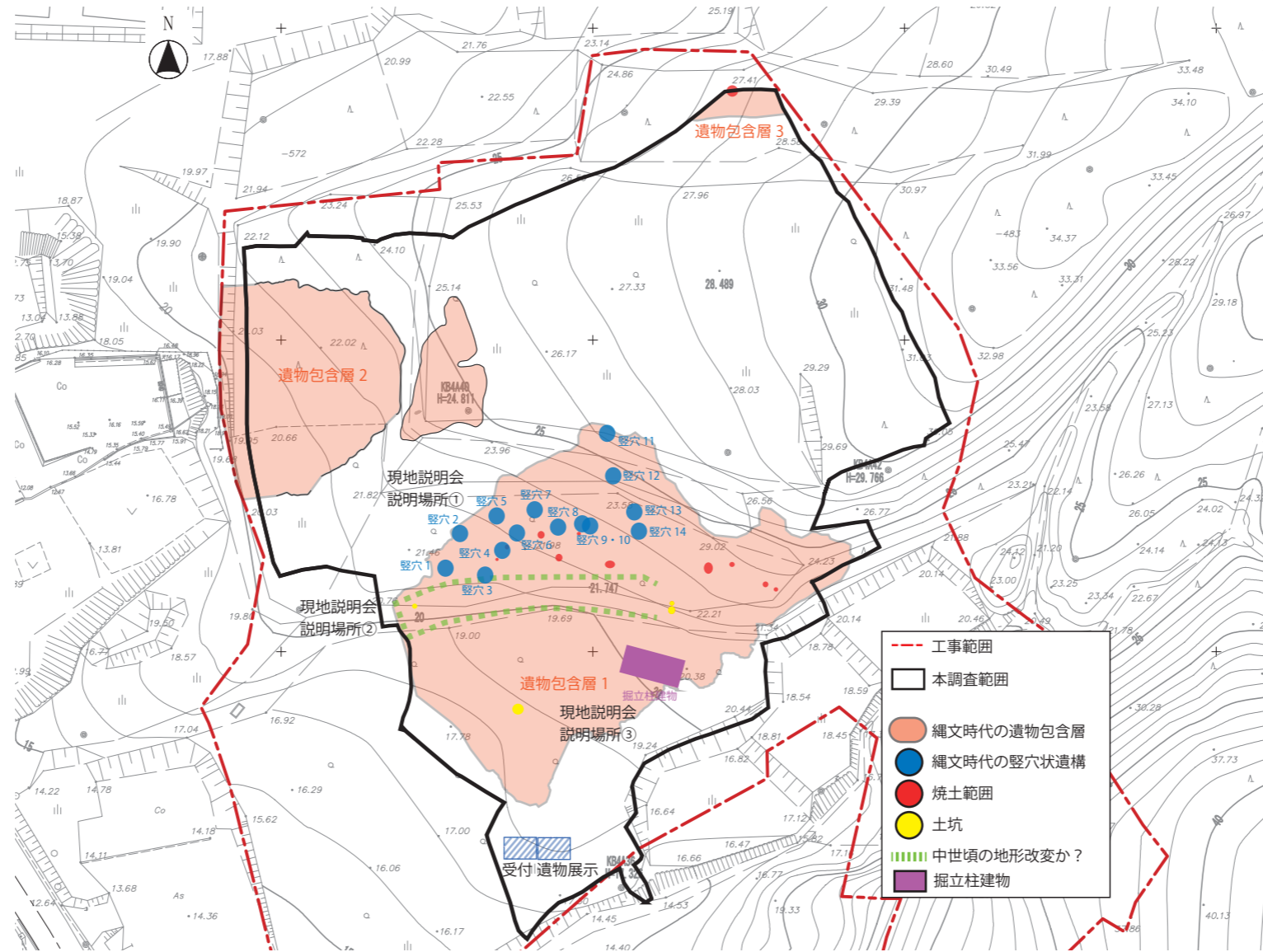
▲縄文土器  
(遺物包含層1、縄文前期、南から)

縄文前期の土器が潰れた状態でまとまって、出土した様子です。



▲焼土と骨片  
(遺物包含層1、縄文前期、南から)

土が赤く焼けている範囲がみられ、その中に、骨片が白くみられました。



▲竪穴状遺構（遺物包含層1、縄文前期、東から）

遺物包含層1では、斜面部を中心に地山を掘り込むように直径が約3mほどの竪穴が14基みられました。竪穴の内側の壁際には柱穴がめぐるものもあり、住居の可能性も考慮に入れています。



▲縄文土器（上から下：古→新、右下：獣面突起）

土器は煮炊きや貯蔵用として作られた当時の必需品です。器面には撚糸を転がした縄文や、軸に紐を巻きつけて回転した「撚糸文」の他、粘土紐や棒状工具で描かれた装飾的な文様がみられます。時期は東北部に分布する大木式土器の編年と年代から、今から7,000年前頃から4,500年前頃までを中心とする時期と考えられます。左下の土器は縄文時代の浅鉢で、ほぼ完形で出土しています。右下に示した獣面突起は、群馬県を中心とする地域に集中して見られる土器の特徴です。現在のところ東北では類例が少なく、羽黒下遺跡で出土した獣面突起は、縄文時代前期頃における関東・北関東などの地域と東北地方の交流を考える上で、重要な資料であると考えられます。



▲石鏃（左）と石匙（右）

石鏃は弓矢の先端につける鏃で、石匙はつまみをつけて携帯ができる万能ナイフと考えられます。



▲磨製石斧

柄に取り付けて木の伐採などに使用されたもので、全面が丁寧に研磨されています。



▲磨石（左）と石皿（右）

木のみや植物などを磨り潰す作業に使用されたもので、接触面が磨られて平らになっています。



▲珞状耳飾

扁平な環の一角所に切れ目のある耳飾りです。



▲土製品

勾玉を模した装飾品です。



▲板状土偶

人形を模した折りの道具です。平面的な板状を呈しており、乳などの表現があります。